

仕えることを通して Through Serving^{*†}

鈴木寛 (Hiroshi Suzuki)

2017 年 12 月 16 日

35: イエスは、すべての町々村々を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった。36: また群衆が飼う者のない羊のように弱り果てて、倒れているのをごらんになって、彼らを深くあわれまれた。口語訳：マタイによる福音書 9 章 35 節-36 節

35: イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた。36: また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。新共同訳：マタイによる福音書 9 章 35 節-36 節

35 Then Jesus went about all the cities and villages, teaching in their synagogues, and proclaiming the good news of the kingdom, and curing every disease and every sickness. 36 When he saw the crowds, he had compassion for them, because they were harassed and helpless, like sheep without a shepherd. New Revised Standard Version: Matthew 9:35-36

35 Jesus went through all the towns and villages, teaching in their synagogues, proclaiming the good news of the kingdom and healing every disease and sickness. 36 When he saw the crowds, he had compassion on them, because they were harassed and helpless, like sheep without a shepherd.

New International Version: Matthew 9:35-36

1 クリスマスにもサービス・ラーニング

この春から、サービス・ラーニング・センターの仕事をしています。サービス・ラーニングは「仕えるところをもってサービス活動をするを通して学ぶこと」を目的としています。本学では、夏の 30 日間の国内外

^{*}国際基督教大学教職員クリスマス礼拝, 2017 年 12 月 16 日

[†]録音記録も含めホームページに掲載: URL <https://icuh-suzuki.github.io/science/index-j.html>

での活動を中心として、サービス・ラーニングについて学び、準備をするコースと、活動のあとに、ふり返りと、発表などを通して分かち合いをする、単位を付与するアカデミック・プログラムです。センターとしては 2002 年から活動をしております。

今までは、社会科学系の先生が担当しておられました。わたしは、数学を教えておりますので、学問的な結びつきを考えることは難しいのですが、学生の活動にも加わり、サービス・ラーニングについて日々学んでいきたいと思っています。

標語として「風が吹けばサービス・ラーニング」を掲げて、というのは、冗談ですが、センターの職員とも、いろいろな面から、サービス・ラーニングについて考えています。そこで、本日も「クリスマスにもサービス・ラーニング」といった感じで、サービス・ラーニングについてみなさんと共に考えることができればと願っています。

2 イエス様が地上でなされたこと

クリスマスは、イエス様の誕生をお祝いする日ですが、イエス様は、どのようなことをされた方でしょうか。

お読みいただいた、マタイによる福音書 9 章 35 節によると

イエスは、すべての町々村々を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった。

とあります。村々を巡回し「教え、宣教し、いやした」。英語では、Teaching, Preaching and Healing と言われます。

わたしは、この「いやし」すなわち Healing が気になっていました。確かに、福音書には、何回も、イエス様が癒やされたことが書かれています。ひとつひとつの記事を丁寧に読んでみると、それらは、単なる奇跡物語として書かれているのではなく、イエス様が「父なる神様のもとからこられたこと」そして「その神様がどのような方であるかを知らせる」という「しるし」または「証 (あかし)」であることが、わかります。しかし、たとえば、先ほどの箇所はどうでしょうか。単に「あらゆる病気、あらゆるわずらいをおいやしになった。」と書かれてあります。

みなさんは、どう思われますか。

3 いやされた？

あるとき、あるかたのメッセージ・ビデオを見ていましたら、ここで「いやした」と書いてある言葉は、実は、治療をした、care をしたという意味のことばだ、と話しておられました。とても、納得したのですが、調べてみることにしました。

ここで使われているギリシャ語は ‘θεραπεύω (therapeuo)’ という言葉です。英語の治療・療法という意味の therapy もこの言葉が語源のようです。ギリシャ語の辞書をみると、たしかに、癒やすとか、治療するとか、健康を回復させるなどの意味がありますが、第一番目の意味は、仕える to serve, do service だとありました。病気を癒やされたことを否定するわけではありませんが、この節で語られているのは、そして、イエス様がなされたのは「あらゆる病気、あらゆるわずらい」に苦しんでいる人たちに、仕えられたと言うことではないでしょうか。

福音書記者でもあるルカは、お医者さんだったと言われていますが、そのルカが書いたとされる、使徒行伝 28 章 8 節 9 節を見てみますと、

（たまたま、）ポブリオの父が赤痢をわずらい、高熱で床（とこ）に就いていた。そこでパウロは、その人のところには行って祈り、手を彼の上においていやしてやった。このことがあってから、ほかに病気をしている島の人たちが、ぞくぞくとやってきて、みないやされた。（使徒行伝 28 章 8 節 9 節（口語訳））

二回いやされたと言う言葉が使われていますが、8 節の方は ίαομαι (iaomai) という別のことばが使われており、9 節は、‘θεραπεύω (therapeuo)’ が使われ、区別されています。

イエス様は、魔法の杖をふるって、かたつばしから、病人の病（やまい）、障害を負ったひとの障害、様々な悩みで苦しんでいる人の悩み・わずらいを、取り去っていかれたのでしょうか。そうかもしれません。しかし、イエス様のされていたことは、これらのひと、ひとり一人に、仕えられたと表現できるようなことではないでしょうか。

福音書を読むと、病気の人、さまざまな障害を持った人、取税人や、罪人と言われる人たちが、イエスのもとに集まってきています。そして、女性たちが、そして、こどもたちが。それは、なぜなのでしょう。

4 深く憐れまれた

お読みいただいた次の節（マタイによる福音書 9 章 36 節）は

36: また群衆が飼う者のない羊のように弱り果てて、倒れているのをごらんになって、彼らを深くあわれまれた。

と続きます。イエス様が、人々に仕えられて、ご覧になったのは「飼う者のない羊のように弱り果てて、倒れている」姿だったと書いてあります。そして、「彼らを深く憐れまれた」。これは、ギリシャ語で σπραχνίζομαι (spragchnizomai) ということばで、聖書に 12 回だけ、それも、すべて福音書で、基本的にイエス様だけに使われていることばです。基本的にと申し上げたのは、善きサマリア人や、放蕩息子といったたとえのなかでも使われているからです。「こころ」のある場所は内臓だと考えられていたようで、その内臓が痛む、傷つくということから来ている言葉だそうです。イエス様は、ひとり一人の問題の治療に携わりながら、さらに深い痛みをうけとられ、まさに、病をその身に負われて、はらわたが傷つくように、こころが痛んだことを意味しているのです。

イエス様も実は「サービス・ラーニングをしておられた」と表現するのは、失礼かも知れませんが、人々の苦しみ、痛み、に寄り添い、はらわたが痛む、そのような状態になられたのでしょうか。そして、イエス様が、神様のこころをも代弁しておられるのだとすると、わたしたちの父なる神様は、人々の苦しみ、痛み、に寄り添ってくださり、その痛みを痛みとしてくださるかたなのかもしれないと思います。

カトリックの司祭で、スピリチュアリティの神学者、人生の最後は、知的障害者の共同体での奉仕に身をささげたヘンリ・ナウエンのいう「傷ついた癒やし人」のイメージは、このようなイエス様なのではないでしょうか。

5 イエス様にならうもの

では、イエス様は、わたしたちに、何を望んでおられるのでしょうか。

すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである。（マタイ 11 章 28 節-30 節（口語訳））

イエス様のくびきを負って、イエス様に学ぶとは、どのようなことでしょうか。おそらく、イエス様が「柔和で心のへりくだった者」だと表現されていることと、関係があるでしょう。そしてくびきを負うということは、共に働くこと、共に生きること、そして、互いに担い合うこととも、関係しているように思います。

それは、互いに仕え合うことと関係しているのかもしれない。互いにとは、どういうことでしょうか。

6 イエス様が非難されるもの

わたしは、学生たちと、聖書を学ぶ会をもっています。イエス様を救い主と信じている学生とそうでない通常ノンクリスチャンと呼ばれる学生とを区別しないことを、その会の大原則としています。その影響でしょうか、半分以上が、いわゆるクリスチャンではない方たちだと思います。そのような仲間と、聖書を少しずつ読み進めていくと、新たに気づかされること、いろいろと気になる箇所が出てきます。その内の一つが、イエス様が延々と「律法学者やファリサイ派のひとたち（パリサイ人）」を非難する箇所です。たとえば、マタイによる福音書 23 章などです。みなさんは、律法学者やファリサイ派の人たちのなにが問題なのだと思われるか。

少し自虐的に「大学の先生や聖書の会主催者」と読み替えて読んでみましょう。

「大学の先生や聖書の会主催者」（彼ら）があなたがたに言うことは、みな守って実行しなさい。しかし、「大学の先生や聖書の会主催者」（彼ら）のすることには、ならうな。「大学の先生や聖書の会主催者」（彼ら）は言うだけで、実行しないから。また、重い荷物をくくって人々の肩にのせるが、それを動かすために、自分では指一本も貸そうとはしない。（マタイ 23 章 3,4 節）

また「大学の先生や聖書の会主催者」は、広場であいさつされることや、人々から先生と呼ばれることを好んでいる。（マタイ 23 章 7 節）

なかなか、つらくなってきます。
このあとは、次のようになっています。

23:8 しかし、あなたがたは先生と呼ばれてはならない。あなたがたの先生は、ただひとりであって、あなたがたはみな兄弟なのだから。

23:10 また、あなたがたは教師と呼ばれてはならない。あなたがたの教師はただひとり、すなわち、キリストである。

23:11 そこで、あなたがたのうちでいちばん偉い者は、仕える人でなければならない。

兄弟として、互いに仕え合うことがないことを批判しているようにも思われます。イエス様のように、人々の中に入って行って、その痛みを自分の痛みとするのではなく、距離を置いて、苦しんでいる人たちを診断するひとたち。たしかに、ある切り口で、ずばりと診断する、わたしを含め、大学の先生に多いのかも知れません。

サービス・ラーニングに関わるようになってから、たくさんの学びがありますが、そのうちの一つは、

“Fixing and helping create a distance between people, but we cannot serve at a distance. We can only serve that to which we are profoundly connected.”

(Rachel Naomi Remen)

改善や援助は、人との間にある距離を保ってなされるが、仕えることはそのようにしてはできない。完全につながらなければ仕えることはできないのです。

(レイチェル・レーマン)

仕えることは、ある切り口で接することではできず、そこには、全人格的な交わりが生じる。他の言い方をすると、共に、くびきを負うこと、相互的な関係が生じるものなのかもしれません。

サービス・ラーニングに参加した学生たちが、自分がサービスをしようとして活動したが、自分がサービスを受けているのではないかと思った。しかし、サービス・ラーニングで来ているという、心を開いて話してくださる方も多く、旅行者としては、絶対に聞けない話を聞き、ともに、問題と向き合うような経験をしているような気がする、と言っていました。それが、サービスの本質なのかも知れません。

同時に、サービスを通して、とても深いレベルで、ひととつながるので、自分が傷つく可能性を引き受けること、そこには、危険も生じるのかも知れません。それを通して、進んでいく方向に変化が生じ、成長し、生き方が変わってしていくのですが、それを、見守っていくことができればと願っています。

7 互いに

わが家の聖書の会は、Discussion Style で、わたしが問いを出して、考えてもらっています。最後には、ひとり一人に、感じたこと、考えたことを一言ずつ言ってもらっています。現在ヨハネによる福音書を読んでいます。13 章のイエス様が弟子たちの足を洗われ、「あなたがたもまた、互に足を洗い合うべきである。」（13 章 14 節）とイエス様が言われる箇所を学んだときです。自分が人の足を洗うのはよいが、人に洗ってもらうのは、ちょっと。という学生が複数いました。

実は、わたしも、似たことを過去に感じていたことがあるので、その時の話をしました。

ポックリ寺というのを知っていますか。そのお寺の御利益（ごりやく）は、死ぬときは「ピンピン・コロリ」と、ポックリ死ぬことができるというものです。実は、わたしも、最近まで、ポックリ寺信者、「ピンピン・コロリ」がいいと思っていました。でも、よく考えてみると、それは「ピンピン・コロリ」でないといけない、寝たぎりの老人の存在は良くないと言っている。そんな自分に気づき、それから、改心して、ポックリ寺信者をやめました。寝たぎりになって、みんなが誰かも判別できなくなるかも知れないけれど、そうしたら

みなにお世話になろうと思っているので、よろしくね。と言ったら、学生たちは「エー？」と言っていました。

しかし、最近、実は、大学での授業も、そして、わが家の聖書の会も、相互的な場だなと感じています。みんなが真剣に聞いてくれるので、ひとり一人の顔を思い浮かべながら、問いを考え、時間をかけて準備をします。しかし、わが家に、集まってくれて、真剣に、自分をぶつけてくれるひとがいて、はじめて、すばらしいときが持てるわけです。最近、わたしが講義をしているときも、聖書の会で、少し長めに話すときも、みんなが、傾聴ボランティア（耳を傾けて聞いてくれる）として、来てくれているのだと思うようになっていきます。

今日も「クリスマスにもサービス・ラーニング」というお題で、話し始めました。わたしは、最近考えていることを、皆さんにも、聞いていただきたいと願って、準備をして、お話ししていますが、実は、みなさんは、傾聴ボランティアとして、仕えてくださっているのかも知れません。お互いに、仕え合うことから、学ぶ世界はとても豊かです。

8 クリスマス

福音書、特に、マタイ、マルコ、ルカという共観福音書を読んでいると、イエス様が生まれてくださった理由が、私たちの罪の贖い（あがない）だとは殆ど書いてないことに気づかされます。ただ一箇所だけ書かれているのは、マタイによる福音書 20 章 28 節、

それは、人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためであるのと、ちょうど同じである（マタイ 20:28、Cf. マルコ 10:45）

マルコにも、同じような箇所があります。ここでも、あがないはちょっとついでという感じで加えられており、イエス様が来られたのは、仕えるためだと言われています。クリスマスは、神様の御子が、この世で、ひとり一人に仕えるために、来られた日。そして、わたしたち、ひとり一人に、イエス様が仕えてくださったように、わたしたちも、互いに仕え合うようにと、招いておられる日なのではないでしょうか。互いに仕えることを通して、わたしたちは、そして、みなさんは、何を学ばれるでしょうか。

互いに仕えることを通して得られることが、イエス様が、わたしたちに与えてくださる、豊かなクリスマス・プレゼントなのではないでしょうか。

9 Educating Heart

わたしたちの大学は、「二度の世界大戦という、文明の危機を背景として、国際協力のもとに設立され、国際文化と理解への実験場として独自の国際社会を学内に実現し、世界共同体の可能性を立証する」ために献学さ

れた大学です。「共に生きる世界の可能性を立証する」実験はまだ続いているでしょうか。UNESCO 憲章は「戦争は人の心の中におこるものだから」と始まります。その心はどのように、育むことができるのでしょうか。Educating Heart というのは、本学でサービス・ラーニングの基礎を据えてくださった、McCarthy 先生の言葉ですが、仕えることを通して、共に生きることを育むことができるのではないのでしょうか。

キリスト教大学はいまも意義があるのでしょうか。もし、わたしたちの大学が、イエス様から学ぶのであれば、イエス様のようにひとり一人に仕えることから始め、互いに仕え合い、互いに愛し合うことが第一にされるキャンパス、そしてそれも、世界へと開かれた共同体をめざすことではないのでしょうか。

わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう」。（ヨハネ 13 章 34・35 節（口語訳））

最近、学生たちに、話すときは、いつも、この聖書の言葉で終わることにしています。ここで使われている「愛する」という動詞は、ἀγαπάω (agapao) ですが、本来の意味は、Welcome だとある辞書にありました。イエス様が、わたしたちを、Welcome してくださったのですから、わたしたちも、お互いに、welcome し、互いに愛し、仕え合う共同体、そこで、共に学び成長していくものたちとなることを願っています。

クリスマスに、イエス様が、どのように生きられ、どのように、仕えてくださったかを思いつつ。

10 祈り

祈ります。

兄弟たちよ。あなたがたが召されたのは、実に、自由を得るためである。ただ、その自由を、肉の働く機会としないで、愛をもって互に仕えなさい。

（ガラテヤ 5:13（口語訳））

For you were called to freedom, brothers and sisters; only do not use your freedom as an opportunity for self-indulgence, but through love become slaves to one another. (Gal 5:13)

天の父なる神様、あなたが、このクリスマスに送ってくださった、イエス様によって教えてくださったように、わたしたち、ひとり一人が「愛をもって、互いに仕える（ガラテヤ 5:13）」ことに、導かれますように。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン。